

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会  
2019年5月11日  
文責：JUN

## わからなさと間違いから学びが生まれる

### 1 特別支援学級における「物語づくり」の授業

それは、各教室を10分ほどずつ順に参観していた時のことでした。篤樹と佐知（仮名）という2人の子どもが学ぶ特別支援学級。子どもは隣同士の席に座り、その前にS先生が坐っていました。

S先生が一枚のプリントを子どもに渡しました。そこには、5つの絵が描かれた「物語づくり」という表題についた右のような課題が印刷されていました（著作権物のため絵の掲載を控えます）。順不同で並べられているこの5枚の絵を、物語になるように並べ替えるという課題です。

こういうとき、「学び合う学び」に取り組んでいるこの学校では、教師は言葉と関りを控え、子どもたちの取組を見守ります。2人はすぐ考え始めました。そして私がその教室にいた10分間のうちに、互いの気づきを出し合い聴き合って正しい順に並べ替えることができたのです。

そのときの様子をこれから皆さんにお伝えするのですが、それは、最初、間違えて、それを互いの気づきで正しい順番にすることができるという学び合いの様子が実にさわやかで素晴らしかったからです。人数の少ない特別支援学級だと教師がすぐ教えてしまい、子どもに学び合わせない傾向があるだけに、このときの子どもたちの関りはとてもよいものでした。

篤樹は最初「1, 5, 3, 4, 2」という順にしていました。この5枚の絵を眺めていちばん目につくのは、子どもなら2の絵でしょう。この絵から遠足に行く様子だとすぐわかったでしょうから、楽しそうなその様子にすぐ目が行くはず。その2を最後に持ってきたのは理にかなっていません。そして、その前がベッドで寝ている4だということも、一晩寝て起きたら遠足という筋で考えたということなのでしょう。ところが、1, 3, 5の3枚の意味がとれていないのです。さあ、2人はそこにどのように気づくかです。

まず、同じ窓際に立つ2枚の絵の違いを持ち出したのは佐知でした。3は雨降り、5はよい天気、そのことを篤樹に告げたのです。愉快なのは、篤樹の態度です。言われてすぐは、それはたいしたこ

下の1～5の絵を正しい物語になるようにならびかえて、〔 〕に順番を書きましょう。

①

机に向かって何かしている女の子の後ろ姿。右手にハサミを持ち、肩越しに人形が見える

②

帽子をかぶり、水筒を下げ、リュックを背負ってにこにこ歩く女の子。

③

窓際に立ち、かなりの降り方で降る雨を洗い表情でなめる女の子。

④

ベッドでぐっすり眠っている女の子。

⑤

窓際に立って、太陽が輝く外の様子を見つめる女の子。窓枠にてるてるぼうずが下がっている

とでないような邪険な返答をするのだけれど、すぐその意味に気づいたようで、あっけらかんと前言撤回、遠足の前の日は雨で、遠足の日に晴れたのだということに気づきます。そのうち、「じゃあ、いつ寝るの？」ということになり、晴れる前なのか晴れてからなのかと考え始めます。

2人の言葉は、わかっている子どもがわからない友だちに教えるというものではありません。自分も考えながら、まるでつぶやくように、けれども、確実に相手のことを意識して話し、その相手の言葉に反応してまたつぶやくように言葉にしています。それは、まさに学びの言葉であり、学ぶための言葉の行き交いです。

こうして、雨降りの3の絵と晴れの5の絵の間にベッドで眠る4の絵が入ることがわかってきます。最後に残ったのが1の絵です。この絵は女の子が何かを作っているように描かれているのですが、女の子が作っているものが何かわからないといけません。その鍵が5の絵にあります。窓際にぶら下がっているてるてるぼうずです。そうです。1の絵で女の子が作っていたのはそのてるてるぼうずなのです。そのことに2人はなかなか気づきません。ですから、1の絵は遠足とは全く関係ないことを遠足の前の日にしていたとしか理解されず、だから、時系列の最初に置くことになったのでしょう。

1の絵の後ろ姿の女の子の肩口からのぞいている人形がてるてるぼうずだということに気づいたのは佐知でした。佐知がそれを口にした瞬間篤樹のテンションが上がったのにこの子の率直さが表れていて見ていた私は微笑んでしまいました。何かがわかった瞬間の子どもの驚き、喜びとはこういうものなのだとうれしくなりました。すると篤樹が窓枠からてるてるぼうずがぶら下がっていることに気づきます。すると、それを受けて、佐知が1, 3, 5のどれが先でどれが後かという順序を篤樹に言います。こうして、「3, 1, 4, 5, 2」という順が確定していきました。

その間、S先生は、二人の前に坐って、彼らの一言一言に一喜一憂するような表情で、けれども、たった一つのこと以外は、二人の考えを誘導するようなことは言わないで、見守っておられました。そのたった一つのこととは「1の女の子は何を作っているの？」でした。ただし、この先生の一言が出て来たのは、二人の考えがかなり進展してからでした。そこには、発見するのは子ども、ただし、その過程で、その子どもの発見を後押しする役割を教師として果たすとしたらどこなのか、それをずっと探り続けるという意識があったものと思われまます。

この様子を見ていた私に確信のようなものが生まれました。それは、学びは、わからなさや間違いから生み出すものだということでした。そして、そのわからなさや間違いが、わからないまま、間違っただまにならないのは、学び合っているからだということでした。

## 2 中学校数学の授業において

年度の始まりである4月にこういう場面が生まれたことの意味は大きいのです。子どもから間違いが飛び出し、その間違いに対して教師が丁寧で温かい対応をしたという場面です。

その授業は、中学校1年数学の授業、単元は「正の数、負の数、数の大小」でした。

授業は、「 $+37/4$ ,  $+9$ 」のような二つの数を比較して、不等号を間に入れて数の大小を表すという課題でした。

授業の後半、課題が「 $-4/3$ ,  $-1.3$ 」の数の大小の問題になったときでした。

当然のことですが、子どもたちはグループでかわり合いながら、一人ひとりが取り組んでいきました。そして、その結果を確認する全体学習になったときでした。

一人の子どもが次のように黒板に書きました。

$$-4/3, < -1.3$$

すると、別の子どもが「私は違う」と言い出したのです。その子どもが前に出てきて黒板に書いたのは、次のようなもので、その説明としてその下のように述べました。

$$-4/3, > -1.3$$

「 $-4/3$  と  $-1.3$  だと分数と小数で違うから、 $-4/3$  を小数に直して、 $4 \div 3$  で計算すると、 $1.333\cdots$  となって、 $1.3$  と比べると、 $1.333\cdots$  のほうの数が多いから、 $>$  になる」

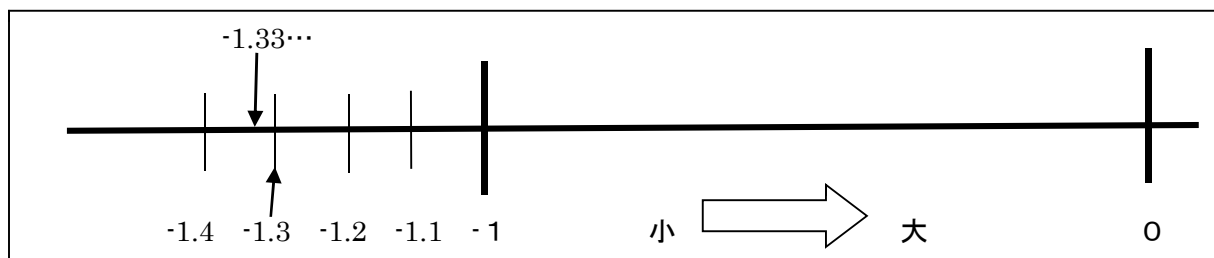
結論から述べると、この子どもの考えは間違っています。確かに、「 $1.333\cdots$ 」と「 $1.3$ 」とを比べた場合、「 $1.333\cdots$ 」のほうが数字としては大きいですが、これは正の数ではなく負の数です。負の数の場合は、数字の小さいほうが「 $0$ 」に近いので数としては大きいのですが、この子どもはその理解ができていなかったのです。

この子どもは、教室の前に出て、黒板に計算をして自分の考えを説明しました。そのときのこの学級の子どもの対応はよいものでした。黙ってその子どもの説明を聴いていたからです。こういうとき、すぐ「違います」とか、あからさまに間違いだと言わんばかりの態度を示す子どものいる学級がありますが、そういうことは一切ありませんでした。教師も、すぐ否定することはしません。そして、じっと他の子どもの出方を待っている様子でした。その後、一人の子どもが、この子どもの間違いを丁寧に説明して、教師が間違っただけの子どものフォローをして授業を終えました。このことから、こういう間違いが安心して出せるわけはこういう教師や子どもたちの受けとめ方にあるのだと思いました。

それにしても、この子どもの間違いは、負の数の学びにとってもっとも重要なことでした。それだけに、この間違いは、指導する教師にとって「本当にありがたいこと」なのです。たいてい、間違いには間違いだけの理由があり、その理由に、その課題にとってもっとも大切なことが含まれていることが多いのです。ですから、間違いを取り上げ、どこがどうなのかを考えるとところから、学びがかなりの深さを伴って姿を現わすし、そのことによって、数学の学習を苦手に行っている子どもが救われていくのです。もちろん「ありがたいこと」という取り上げ方が不可欠ですが。

ただ、この間違いへの対応を教師が一斉指導的に行うのはよいことではありません。そうではなく、こういうときこそ、グループにして、子どもたちに考えさせるのです。その際、学びを深めることのできる問いを出してやらせるとよいでしょう。

この授業の場合は、分数を小数に直すというこの子どもの説明をそのまま受けとめるのです。そして、「計算した数を数直線に書き入れて、どちらが数として大きいかについてみんなが理解できるようグループで学び合おう」とすればどうだったでしょうか。そうすれば次のような図を描くことになったのではないのでしょうか。



大切なことは、この図を教師が描いてみせることではありません。この通り描けなくてもよいので、子どもたちが数直線に描くことです。「ここが〇〇じゃない?」「そう、ここが〇〇だよ」と言葉にしながらか、聴き合いともに考え合っ、子どもたちが描くようにすることです。それは、このように視覚化しないと理解できない子どもがいるからです。

これが描けたとき、数字の大小と数の大小の関係が、正の数と負の数の場合どう異なるのか、抽象的ではなく具体的にわかってくるでしょう。そうするために、この間違いは絶好のものだったと言えます。

### 3 わからなさや間違いを宝物にできる学級に

この二つの事例は、なんでもない小さな出来事です。そんな小さな出来事をこんなにも大切に引き上げるべきだというのは、それがこれから始まる一年の学びにとって非常に重要な「学び方の基本」になるからです。

すべての子どもの学びが深まるには、わからなければ尋ねる、間違えてしまってもそこからその原因を探り道を開いていく、そういう態度が当たり前のようにとれないといけません。それには、わからなさや間違いが恥ずかしくないことであり、学びとはそこが出发点なのだと本気で思う学級にしなければなりません。

けれども、そういう考えは、教師がどれだけ言葉を紡いで説得しても子どもたちに入っていきません。子どもたちを取り巻く社会に存在する価値観が子どもたちの考えを縛っているからです。それに対して、わかることを目指すのだけれど、それらはすべてわからなさが出发点なのだと子どもたちが本気で思うようにするには、現実にそうなのだと思える事実がなんとしても必要なのです。1回や2回ではだめです。何回もそうなる事実を体験したとき、ほんとにそうなのだという思いが生まれます。それは、学びに対する安心感と期待感を生みだします。

そして、もう一つ大切なこと、それは、仲間のわからなさや間違いに対するすべての子どもの対応の仕方です。何よりも教師がわからなさや間違いを大切に引き、そこから学びを生み出すようにしなければなりません。子どもたちも教師と同じような気持ちでわからなさや間違いに対応しなければなりません。ひょっとすると、子どもたちのどんなことでも尋ねられるという安心感の元は、教師よりも仲間たちの態度なのかもしれません。小学校低学年の場合は、教師の対応で大きく変わるでしょうが、高学年や中学生の場合は、教師の対応はもちろんだけれど、同じように学ぶ仲間の対応がかなり気になるのではないのでしょうか。教師は、子どもたちのそういう関係性に敏感でなければなりません。私は、仲間に寄り添える学級、違いから学び合える学級にする大切さをいつも話しますが、このことを疎かにしては「学び合う学級」は生まれません。

だから、年度はじめの4月5月で、どれだけ的事实を生み出せるかが大切なのです。ここに紹介したような出来事を大切にしたいのです。

10連休という長期の休みが明けた今、先生方は、4月に一旦スタートしたけれど仕切り直しだという感触を感じておられるかもしれません。そういう意味で、いま一度、丁寧に子どもたち一人ひとり、そして子どもと子どもをつながり、さらに、間違いやわからなさへの対策について見直しをして、その取り組みをしていただきたいと思います。